

京都教育大 ○杉本弘子 山崎 隆
帝国女子大 後藤田男

目的 植物染料による染色は郷土民芸品や手工芸染色、特に草木染めとして絹織物に適用され、独特の技法として存続している。その染色は天然の材料と長年の経験による「感」により行われることから、それぞれの作品は独特の色調や趣をもち出す。それがまた植物染料による染色の良さのひとつとなっている。我々は沖繩における黄褐色染めで重要とされている福木の樹皮を用いて、経験に頼るのではなく、常に再現性のある染色性を得るために、色素を抽出し、その性状について検討した。

方法 乾燥保存した福木樹皮に水を加えて2時間煮沸し、その後濾別する。濾別した残渣に再び水を加えて同様な方法で煮沸抽出し、汁液を得る。この操作を1~5煎までくり返し、各々の汁液から不純物を取り除き、精製をくり返し黄褐色色素を得る。それらの色素の性質を調べた後、絹布に染色を行い、媒染剤の種類、濃度並びに堅牢性について検討した。

結果 1煎から5煎までの色素の収量には差があり、それは色素の溶解度に関係している。又、それらの色素は繊維に対する直接性はなく、試料布に媒染された媒染剤との結合により染着される媒染材料で、カリ明ばん、クロム明ばん、硫酸オ1鉄媒染の中では、カリ明ばん、クロム明ばん媒染材料が色素の持ち味を最もよく醸成していると思われる。沖繩における在来法による煎汁回数と我々が行った抽出との間に、染色性及び民芸品の風合いとの間に定性的に関連性のある事を見出した。洗ひ、日光、汗などに対する堅牢度は高く、在来法より精製色素による方がより大きい。